

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Discourse Characteristics of Superior-Level Non-Native Japanese Speakers: Analysis Using a Text-Mining Technique

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2015-10-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 松田, 真希子, 宮永, 愛子, 庵, 功雄, MATSUDA, Makiko, MIYANAGA, Aiko, IORI, Isao<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15084/00000503">https://doi.org/10.15084/00000503</a>   |

## 超級日本語話者の談話特性

——テキストマイニングを用いた分析——

松田真希子<sup>a</sup>      宮永 愛子<sup>b</sup>      庵 功雄<sup>c</sup>

<sup>a</sup>金沢大学／国立国語研究所 共同研究員

<sup>b</sup>関西学院大学／国立国語研究所 共同研究員

<sup>c</sup>一橋大学／国立国語研究所 共同研究員

### 要旨

本稿は、いわゆる超級レベルの日本語学習者の口頭産出における談話的特徴を探るものである。まず、本研究における枠組みを得るために、ACTFL-OPIやCEFRの評定基準、および先行研究をもとに、超級話者の談話の特徴づける要素を取り出し、それらを談話内容の質に関わる部分と聞き手への配慮に関わる（メタ言語）部分に大別した。そのうち、談話内容の質に関わる部分として、結束性のある談話を産出するために重要な指示表現の使用傾向を、そして、聞き手配慮に関わる部分として、フィラー、終助詞、試行的提示の使用傾向を、OPIインタビューデータをもとに、テキストマイニングの手法を用いて、上級話者と超級話者で比較分析した。その結果、超級話者は上級話者に比べ（1）文脈指示のコの使用頻度が高い、（2）発話緩和や発話の埋め合わせの機能を持つ「ね」の使用頻度が高い、（3）フィラーの多様化が見られる、（4）言葉を選んでいることを示す試行的提示の使用頻度が高い、などの特徴が見られた\*。

**キーワード：**超級話者、テキストマイニング、指示表現、フィラー、終助詞

### 1. はじめに

第二言語習得の中でも母語の転移が大きいとされているものの一つに談話領域がある。例えば、談話の構成については、英語では結論を先に述べ、その後その結論を支える根拠を述べる演繹法が一般的である。一方、日本語、中国語、タイ語、韓国語では準帰納法<sup>1</sup>が一般的であることなどが指摘されている（Hinds 1990）。

このように、談話の構成には母語の転移が大きく関わるという認識は既存のものであり、母語話者別の日本語の談話研究の報告は数多く行われている（生駒・志村 1993、カノックワン 1997、猪崎 1997 など）。しかし、その多くは、初級～上級レベルの非母語話者が分析対象になっているもので、超級話者が会話をする際にどのような談話的特徴があるのか、どの母語話者においてどのような談話ストラテジーが転移するか、また、どのレベルでどのような転移が見られるのかの研究も、十分に行われているとは言えない。その理由は上級や超級話者の談話というもの

\* 本稿は国立国語研究所の領域指定型共同研究プロジェクト「学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築」（プロジェクトリーダー：山内博之）の研究成果である。

<sup>1</sup> 準帰納法とは論旨や結論を文章の最後におく帰納法と類似し、論旨にあたるものは文章の最後に出てくるが、1) 文章の目的が冒頭ではなく遅れて述べられること、2) 文章内の情報は文章全体のトピックと間接的な意味関係を結んでいること、3) 結論はその前で述べられる論理の方向と必ずしも密接に関係しているわけではないこと、などが帰納法とは異なっている。

が、どのような言語事実に支えられて実現するかの解明が、日本語を対象とする習得研究において部分的にしか進んでいないことによる（橋本 2011）。

そこで、本稿ではいわゆる上級～超級（特に超級）レベルの日本語学習者の口頭産出における談話的特徴を探るために、OPI（Oral Proficiency Interview）データを扱い、その中でも、特に、段落単位で内容にまとまりのある比較的長い発話が出現する「描写・叙述タスク」と「意見表明のタスク」に焦点を当てて、分析する。

## 2. 先行研究

### 2.1 上級レベル以上の話者とは

上級話者、超級話者というのがどのような談話を構成するかについて包括的な指針を示しているものとしては ACTFL の OPI マニュアル（ACTFL / 牧野 1999）と European Council の CEFR（Common European Framework of Reference for Languages）（吉島・大橋訳 2004）がある。これらはいずれも課題遂行力の有無を基準としてレベル判定基準が示されている。今回分析対象とした OPI のレベル判定基準の概要を表 1 に示す<sup>2</sup>。

表 1 OPI のレベル判定基準（概要）

|    | テキストの型 | 話題         | 機能                                |
|----|--------|------------|-----------------------------------|
| 中級 | 文      | 日常生活等身近な話題 | 日常生活でサバイバルできる                     |
| 上級 | 段落     | 具体的な話題     | パラフレーズ、詳述・描写ができる                  |
| 超級 | 複段落    | 具体的・抽象的の話題 | 詳細な描写・叙述、意見表明および弁護、議論展開、仮説形成等ができる |

さらに、ACTFL のマニュアル（前掲）には各話者の特徴が詳細に述べられている。本稿では超級話者の特性を本稿に関わる部分のみ抜粋し表 2 に示す。

表 2 超級話者の解説

|                       |  |
|-----------------------|--|
| フォーマルとインフォーマル         | フォーマル、インフォーマルなど異なった状況に対して、適切な称号・人稱などを使って呼びかけることができ、多少話し方を使い分けることができる。  |
| 会話のストラテジーと談話管理のストラテジー | ストラテジーは挫折してしまうかもしれないという危機に陥ったコミュニケーションを促してくれる手段をさす。（超級話者はこれらのストラテジーを有している。）例：説明を求める会話のストラテジー、修辞疑問のような談話管理のストラテジー |
| 直接話法と間接話法             | 超級話者は最も複雑な形以外の直接・間接話法は取り扱うことができる。  |

<sup>2</sup> ACTFL-OPI の超級は CEFR での C1 であることが想定される。現在 ACTFL-OPI は超級のさらに上のレベルを設定準備中であり、そのレベルが CEFR の C2 に対応することが予想される。

|              |   |
|--------------|---|
| 談話構成         | 長い段落の産出。談話構成には話者の母語の影響が残り、目標言語の談話構成を明確に示していないかもしれないが、十分に結束性があるので、対話相手はタスクの内容や話の流れを理解できる。  |
| 複段落          | 統語の面からも、テーマという点からも関連付けられ、複合的に組み合わせられた発話を用いて、考えを持続し、さらに展開させていく。(以下略)   |
| 精密な描写        | 聞き手にある特別なイメージを呼び起こすだけの細部にわたる情報が豊富に含まれるが、どう表現されるかは目標言語によって異なることもある。  |
| 精密な叙述        | 超級レベルにおける叙述は、ある出来事を適切な順序(時間・論理・対照などといった点から)で、しかもふさわしい談話構成と結束性のある形で語ることである。(略)超級の語り手は一貫性と語彙的・構文的正確さを維持しながら、感情を高め、ドラマ性を創造するために口調を早めたり遅くしたりというような言語ストラテジーを使うことはもちろん、物語を展開させたり、重要な前景情報や背景情報、自分の評価を差し挟むために一旦中断することもできる。(以下略) |
| 迂回能力         | 超級話者は対話相手が理解しにくいと感じたり、ある用語や概念がその文化にはなじみのないものの場合、スムーズに別の表現を見つけることができる。迂回はほとんど相手に気づかれない。情報を付け加える必要性も予測し、相手から聞かれる前に自発的に行う。(一部改編)   |
| 裏付けのある意見を述べる | 超級では上級よりも幅広い洗練された証拠により裏付けられる。また、対立する側の意見も考慮することができ、裏付けや例を付け加えたり、論理上の欠陥や受け入れがたい前提を指摘しながら、論理的に筋道の通った議論を展開し、相手からの反論に対処することができる。  |
| 結束性          | 超級話者は、トピックとそれに関する述部を適切に言い表す談話構造を選択し、それに沿って話すことで結束性を示す。談話の中のどの文章も前述されたものにかかわっていて、それだけが持つ意味以上のものを伝えることができる。同様に後に続くものの裏付けとなっていたり、話をさらに進めたりする。(以下略)   |

続けて CEFR の基準を示す。OPI のいわゆる上級～超級にあたるのは B2 レベル以上である。OPI は CEFR より談話能力に関する基準が詳しく述べられているため、CEFR は概要のみ示す。

表 3 CEFR の基準 (会話能力)

|     |                                  |  |
|-----|----------------------------------|--|
| C2  | Mastery                          | CEFR で記述されている最も高いレベルであり、言語使用の正確さ、適切さ、容易さという側面からも非常に熟達度が高い。                 |
| C1  | Effective Operational Efficiency | 幅広く言語を使用し、流暢に、自然にコミュニケーションをすることができる。また、しっかりとした構成を持った談話を産出することができる。         |
| B2+ | Strong Vantage                   | 他の話し手に配慮しながら議論の発展に寄与するなど、会話の管理に関する能力が顕著に現れる。また、一貫性や結束性を持った活動や、交渉ができるようになる。 |

|    |         |  |
|----|---------|--|
| B2 | Vantage | 意見の根拠などを提示しながら、効果的に論述することができる。また、会話の際に様々な方略を活用できるなど、談話の中で自分の立場を維持する以上のことができる。さらに、自らの間違いを自主的に修正するなど、言語に対する意識が高まる。 |
|----|---------|--|

これらの基準の中で、上級、超級を特徴づけるキーワードは何であろうか。記述を見る限りでは、中級には現れず、上級になって現れるキーワードとして「複段落」「スピーチレベル」「聞き手（他の話し手）への配慮」「順序」「前景・背景」「一貫性」「結束性」「会話の管理能力」「自己モニター」「迂回（言い換え）」などが考えられる。

本稿では、これらを、上級レベル以上で要求される高度な談話を形成する要素として、「談話内容の質に関わる要素」と「聞き手への配慮に関わる（メタ言語）要素」に大別した。次節では、これらに関する先行研究を概観する。

## 2.2 過去の談話研究に見られる「高度な談話」を形成する要素と学習者との関係

### 2.2.1 談話内容の質に関わる要素

OPIやCEFRの基準でも示されているように、高度な談話を形成するために必要なものとして、談話内容の質の高さがある。これらは、書き言葉であるテキストと同様、段落構成力や、一貫性、結束性などを要求する。

整合性、結束性の研究は数多く存在する。Halliday & Hasan (1976) は、結束性には文法的結束性と語彙的結束性があり、文法的結束性には指示、代用、省略、接続の四つがあり、語彙的結束性には再叙とコロケーションがあると述べている。日本語のテキストの結束性については、指示（文脈指示のコ、ソ、ア）に関する研究を中心に、庵 (2007)、堤 (2012) 等数多く行われている。

日本語学習者の指示表現の使用を分析した研究には、阪上 (2010)、橋本 (2011)、村田 (2012) 等がある。阪上 (2010) は OPI-KY コーパスと母語話者コーパス（上村コーパス）を用いて分析し、学習者レベルが高まるにつれ、ソ系指示詞の使用が増えていること、また母語話者と比べ、上級、超級話者にはソ系の不適切かつ過剰な使用が見られることを報告している。村田 (2012) は CEFR の B1 と B2 の学習者データを分析した結果、B1 レベルではコ系が優勢的に用いられていたが、B2 レベルではコ系よりソ系指示が増加することを報告している。橋本 (2011) は OPI の超級話者データを分析したところ、超級話者には「面」「辺」という実質語が「そういう（面）」のようにソ系の指示表現と共起して用いられる例が多数出現するため、これらの表現が超級のマーカーであると指摘している。

結束性に関するもう一つの指標として「のだ」の使用が挙げられる。「のだ」については、坪根 (2009) が OPI データを対象に「のだ」を含む「の」の使用状況を調査・分析している。その結果、中国、韓国、英語のすべての母語話者で上級→超級となるにつれ「のだ」「のだが」「のか」の使用数が伸びていることが報告されている。また、母語別に見た場合、中国語話者は他の二つの母語話者と比べ、中級段階で正用に進む用法が少なく、誤用が多いこと、上級話者になっ

て他の母語話者同様に「のだ」の使用に広がりが見られるが、それでも他の母語話者に比べ使用する範囲が狭いこと、それは中国語の母語の干渉が原因であることが報告されている。また、東・櫻井（2012）はCEFRのB1レベル（中級前半）の話者のインタビューデータを分析し、B1話者の文末における「のだ」の不使用が談話の結束性を下げていることを報告している。

省略・接続においては藤原・竹井（2010）が、母語話者を対象に談話を調査した結果、接続詞が使用されると省略の容認度が上がることを報告している。

また、文末の丁寧形のコントロールも結束性においては重要である。橋本（2011）では下記に示すような真性モダリティを持たない文の連続+文脈指示が超級話者の特徴として報告されている。また、こうした例は「複数の具体例の提示」を目的として行われていることを報告している。実際、母語話者の例を見ても同様の文末形のコントロールと指示表現の併用が談話の結束性を上げている例が多数確認される（例（1）、（2）を参照）。

- (1) え、やはり昔の伝統ですね、あの跡継ぎになる人ですからね、女性ですとやはり将来お嫁に行く、まあよその人になってしまう、ええ、まあそういう古い考え方がまだ根強くあるですからね（CS04）
- (2) 背景には、官僚の質が低下していることもあると思いますよ。霞ヶ関の人間は元々民意に疎い。その上、この五、六年の間、政権が次々変わったこともあり、腰を落ち着けて仕事をする機会が減っている。その結果、たとえば沖縄問題に取り組んだ経験が豊富で、幅広い人脈をもつ官僚がいなくなったりしているのではないのでしょうか。（片山善博の談話：『文藝春秋』90-12: 111, 2012）

また、効果的な代用が行われているかどうかは習熟度を測る上で有効であろう。さらに接続表現が効果的に使用されているかも、習熟度をチェックするための材料になるだろう。

### 2.2.2 聞き手への配慮に関わる（メタ言語）要素

Stubbs（1983）は教室談話の調整について、発言量の決定、理解のチェックと確認、要約、定義づけ、編集、訂正、話題の特定化などが行われていることを述べている。その中で、伝達に使用された言語の意味を明確にし、系統化し直す手段の使用者が、極めて限定されていることを述べている。メタ言語を用いる話者は、談話をプランを持って進行していく人物、会話のターンを一定の間保持し続ける（であろう）人物に限られるからである。

メタ言語の中の編集、訂正に関わると考えられる部分については甲田（2001）が詳しく分析している。甲田はメタ言語に関わる領域として注釈・補充を挙げ、接続詞との異なりの根拠として（1）同じ意味に相当する接続助詞や他の接続の形式を有しない、（2）複文のレベルでは成立しない、の2点を挙げている。甲田が示す注釈・補充の言語形式を表4に示す。



表4 注釈・補充の言語形式 (甲田 2001)

|       |       |                         |
|-------|-------|-------------------------|
| 注釈・補充 | 解説    | なぜなら, というのは, 例えば        |
|       | 換言・同帰 | すなわち, つまり, 要するに, だって    |
|       | 制約・追補 | ただし, ただ, もっとも, なお, ちなみに |

また, 北野 (2005) は『日本語話し言葉コーパス』をもとに「というか」に代表される形式の機能を「試行的提示」とし, それぞれの形式と機能について分析している。対象となった形式を表5に示す。これらも聞き手配慮 (メタ言語) の一つである。

表5 試行的提示 (北野 2005)

|         |          |              |
|---------|----------|--------------|
| X [と／て] | 言うか      | [φ/ね/しら/ですね] |
|         | 言うのか     | [φ/な/しら]     |
|         | 言いますか    | [φ/ね]        |
|         | 言うんですか   | [φ/ね]        |
|         | 言うんでしょうか | [φ/ね]        |
| X ですか   |          |              |

また, 榊原 (2008) は KY コーパスと上村コーパスを用いて, 学習者と母語話者の「前置き表現」の傾向の異なりについて次のように分析している。母語話者と学習者が発した前置き表現をメイナード (1993) の分類に従い (1) ジャンル移動の発表 (2) 物語の価値を主張する (3) 物語の源はどこに, または誰にあるかを述べる (4) 聞き手にどんな関係があるかを述べる (5) その物語を相手がまだ知らないことを確かめ, 物語を披露してもいいか許可を取る (6) 物語のタイトルとも言えるようなテーマの発表をする (7) 聞き手から出されたテーマを受け入れた形の物語であることを伝える, という七つに分類した。その結果, (1) (4) 以外では前置き表現が使用されていたことが明らかになった。そして英語話者は前置き表現の使用が最も少なく, 韓国語話者が最も母語話者の使用に近いこと, レベルが高くなるにつれ, 前置き表現が多く使用されていることが報告されている。

これらの聞き手を意識したメタ言語の使用は, 発話内容の産出に余裕がなければ十分に行うことができないことが容易に予想される。同時に, こうしたメタ言語を多用するか否かは個人の属性や母語の属性にも関わると予想される。そのため本研究でもこれらのメタ言語に関わる要素が上級話者, 超級話者でどのように出現しているかを調査したい。

### 3. 本稿における枠組みの提示

ここまで, 上級・超級話者に見られうる談話的要素について, ACTFL-OPI の評定基準と CEFR の枠組み, および, 先行研究を概観したところ, 談話内容の質に関わる要素と, 聞き手への配慮に関わる (メタ言語) 要素に大別することができた。これらをまとめたのが, 表6である。

談話内容要素とメタ言語的要素は共存可能であり, 必ずしも分離されるわけではないが, 便宜的に分けておく。また, 一つの要素が二つの機能を担う場合もあるため, 重複しているところもある。なお, 本研究では明示的に確認が困難な内容部分は考察対象から除いた。

表6 上級・超級談話を形成する要素

| 談話要素                            | 具体的な要素・形式          |   |   |
|---------------------------------|--------------------|---|---|
| 談話内容<br>(伝達内容)<br>の質に関わる<br>部分  | (1) 結束性            | ○指示, 代用, 省略, 接続<br>「これは」「このような」「したがって」<br>○モダリティ, 連体修飾<br>「～のだ」<br>○丁寧さのコントロール (普通体と丁寧体の混在)<br>○中心文・支持文の明確化 |   |
|                                 | (2) フォーカス          | ○強調, 非強調 (分裂文等)<br>○視点のコントロール, 前景・背景化 (「のだ」文, 受身文, 使役文等)<br>○中心文・支持文の明確化                                    |   |
|                                 | (3) 精密さ            | ○時間・空間関係の書きわけ (タクシス等)<br>○多様な語彙, 慣用的表現等の使用<br>○文法的な正確さなど  |   |
|                                 | (4) 語法, 引用         | ○直接・間接語法 (引用)   |   |
| 聞き手への<br>配慮に関わる<br>(メタ言語)<br>部分 | 発話行為の目的的<br>提示     | (5) 発話行為全体<br>における発話の位置<br>づけ   | 前置き, 背景説明<br>「前置きですが」「～なんですけど」<br>本題「ここからが本題ですが」<br>結論「まとめれば」「結論を言えば」 |
|                                 |                    | (6) 前後の発話内容<br>との関係性の表明   | 「繰り返しになりますが」<br>「さっき言ったこととも関係しますが」<br>「さっきの話とは違うんですが」                 |
|                                 |                    | (7) 発話量に関する<br>表明   | 「一言で言えば」<br>「一言では言えないんですが」<br>「長い話になりますが」<br>「長くなりましたが」               |
|                                 |                    | (8) 試行的提示   | 「～というか」「～ですか」「(一応)」「とりあえず」「まあ」  |
|                                 | 注釈・補充              | (9) 解説  | 「なぜなら」「というのは」「例えば」  |
|                                 |                    | (10) 換言・同帰  | 「すなわち」「つまり」「要するに」「だって」  |
|                                 |                    | (11) 制約・追補  | 「ただし」「ただ」「もっとも」「なお」「ちなみに」   |
|                                 |                    | (12) 注釈的説明  | 「だから～」「～のだ」   |
|                                 |                    | (13) 修正・訂正  | 「あ」「いや」   |
|                                 | (14) 注意喚起,<br>発話緩和 | 「～ね」(非終結部)「～よ」<br>「～でしょう?」<br>「いや」「もう(フィラー)」「こう」  |   |
|                                 | (15) 確認, 同意<br>要求  | 「～よね」<br>「～ね」(終結部)<br>「私の言うこと分かります?」<br>「ここまで大丈夫ですか?」   |   |

例えば、中国語を母語とする超級話者の談話を見ると、次のように上述の要素が確認される。  
Tはテスター、Sはインタビューを受けている非母語話者を表す(以下同じ)。

- (3) T: あの一じゃあにほんにいらっしゃって、〈はい〉あのにほんの印象っていうのはどう  
でしょうかねえ  
S: そうですねえ、〈んー〉(8) まあ—これ (7) 一言で言いきれないんー、ですけども、〈ええ〉  
(8) まあ、一応にほんじんはすごく礼儀正しいというのはすごく印象的です、んー、〈あー



そうですか) はい, 〈はー〉で, そしてー, あの, わりと, いし, なんかー一生懸命やっ  
ているという, あのー, 印象もあるん (14) ですね, なんかに, 〈ええ〉ええ, あのー, つ  
いて (14) ですね, 〈ええ〉 (14) こう, (9) 例えば中国語を勉強しているかたが, すごく  
一生懸命勉強しててー, 〈えーえー〉\*\*わたしもー, 時々感心, して, (14) しまっ  
てですね, 〈ええ〉あーわたしも (1) そういうふうに勉強しなければ (1) いけないなーとか,  
思われます, 〈あー〉ことも何度もありました, 〈あーそうですか) はい (CS02)

次節から, 実際に OPI データを用いて, 上級話者と超級話者の談話上の異なりについて見て  
いく。本稿では特に, 談話内容の質に関わる要素のうち, 結束性のある談話を産出するために重  
要な指示表現と, 聞き手への配慮に関わる要素のうち, 注意喚起や発話緩和の機能を持つ終助詞  
とフィラーの使用, および, 聞き手に向けて表現を選んでいること示す試行的提示に注目し, 分  
析する。

#### 4. 上級話者と超級話者の談話上の異なりについて

##### 4.1 結束性に関わる部分：指示表現の使用<sup>3</sup>

上級話者と超級話者の談話上の異なりや超級話者に見られる談話の「うまさ」の抽出を行うた  
め, KY コーパスに収録されている中国語, 英語, 韓国語の超級話者各三名分, 上級話者各三名  
分を調査した<sup>4</sup>。ここでは, 指示詞について, テキストマイニングツール (KH-Coder) を用いて  
分析する。まず, KH-Coder によって集計された抽出語リスト中に出現していたコソアの語彙か  
らコーディングルール (表7) を作成した上で, 上級話者と超級話者の使用傾向を比較した。そ  
の分析結果を表8, 9に示す。

表7 コーディングルール (コソア)

|     |  |
|-----|--|
| *こ系 | この前 or このごろ or こう or こんなに or このー or こんなふうに or これから or これ   |
| *そ系 | そのまま or その後 or その or そうですね or そんな or そのー or そんなに or そうね or<br>そうすると or そう or それほど or そんなふう or それだけ or それ |
| *あ系 | あの or ああ or あんなに or あのー or あれ  |

表8 上級・超級におけるコ系, ソ系, ア系の語使用 (KH-Coder)

|                  | *こ系         | *そ系          | *あ系          | ケース数 (文) |
|------------------|-------------|--------------|--------------|----------|
| 超級               | 98 (18.08%) | 194 (35.79%) | 122 (22.51%) | 542      |
| 上級               | 33 (3.52%)  | 237 (25.27%) | 123 (13.11%) | 938      |
| 合計               | 131 (8.85%) | 431 (29.12%) | 245 (16.55%) | 1480     |
| カイ二乗値<br>(自由度 1) | 88.504**    | 17.935**     | 21.280**     |          |

☆集計単位は文。数値はコーディング単位で集計した場合の度数と割合を表す。カイ二乗値は数値が大きければ大きいほど差が大きいことを指す。アスタリスク\*は有意水準 5%, \*\*は有意水準 1%を指す。

<sup>3</sup> ここでの指示表現とはコソアを含む形式とする。すなわち, 指示詞とフィラーの両方を含む。

<sup>4</sup> 採用したデータは KY コーパスの通し番号の上から三名ずつを採用。

表9 各話者の使用状況 (KH-Coder)

|      | *こ系         | *そ系          | *あ系          | ケース数 (文) |
|------|-------------|--------------|--------------|----------|
| CS01 | 13 (28.26%) | 19 (41.30%)  | 0 (0.00%)    | 46       |
| CS02 | 19 (33.93%) | 29 (51.79%)  | 23 (41.07%)  | 56       |
| CS03 | 3 (3.95%)   | 25 (32.89%)  | 5 (6.58%)    | 76       |
| ES01 | 11 (12.64%) | 23 (26.44%)  | 22 (25.29%)  | 87       |
| ES02 | 12 (18.46%) | 26 (40.00%)  | 22 (33.85%)  | 65       |
| ES05 | 6 (13.04%)  | 21 (45.65%)  | 23 (50.00%)  | 46       |
| KS01 | 5 (8.77%)   | 13 (22.81%)  | 11 (19.30%)  | 57       |
| KS03 | 12 (20.69%) | 14 (24.14%)  | 5 (8.62%)    | 58       |
| KS06 | 17 (34.00%) | 24 (48.00%)  | 11 (22.00%)  | 50       |
| CA01 | 1 (0.68%)   | 33 (22.30%)  | 21 (14.19%)  | 148      |
| CA02 | 2 (2.53%)   | 31 (39.24%)  | 13 (16.46%)  | 79       |
| CA03 | 7 (5.51%)   | 29 (22.83%)  | 13 (10.24%)  | 127      |
| EA01 | 1 (1.05%)   | 43 (45.26%)  | 28 (29.47%)  | 95       |
| EA02 | 1 (0.86%)   | 21 (18.10%)  | 8 (6.90%)    | 116      |
| EA03 | 2 (1.83%)   | 30 (27.52%)  | 19 (17.43%)  | 109      |
| KA01 | 0 (0.00%)   | 21 (26.92%)  | 2 (2.56%)    | 78       |
| KA02 | 8 (14.29%)  | 24 (42.86%)  | 16 (28.57%)  | 56       |
| KA03 | 11 (8.53%)  | 5 (3.88%)    | 3 (2.33%)    | 129      |
| 合計   | 131 (8.86%) | 431 (29.16%) | 245 (16.58%) | 1478     |

☆CはChina, EはEnglish, KはKoreaを指す。またSはSuperior (超級), AはAdvanced (上級)を指す。CSとはChina-Superiorの略である。

調査の結果, すべてにおいて超級が上級よりも有意に高頻度であったが, 特にコ系の使用頻度に差があることが分かった。そこでコ系のみ別のコーディングルール (表10)を設定し, 比較した。結果を表11, 12に示す。また, ア系の「あの」「あのー」についてもKH-Coderで比較が可能であったため, 使用頻度を分析した (表13)<sup>5</sup>。

表10 コーディングルール (コ系のみ)

|      |               |
|------|---------------|
| *これ  | これから          |
| *こう  | こう or こういう    |
| *こんな | こんな or こんなふうに |

<sup>5</sup> 表8と9では同じデータ群を対象としているが, KH-Coderでは条件をかえると「ケース数 (文)」の合計が2文ずれる結果となる (有意差はわからない)。表11～13と15も同じ。

表 11 上級・超級におけるコ系の語使用 (KH-Coder)

|                  | *これ        | *こう         | *こんな      | ケース数 (文) |
|------------------|------------|-------------|-----------|----------|
| 超級               | 45 (8.30%) | 84 (15.50%) | 8 (1.48%) | 542      |
| 上級               | 25 (2.67%) | 25 (2.67%)  | 1 (0.11%) | 938      |
| 合計               | 70 (4.73%) | 109 (7.36%) | 9 (0.61%) | 1480     |
| カイ二乗値<br>(自由度 1) | 22.992**   | 81.048**    | 8.513**   |          |

表 12 各話者のコ系の使用状況 (KH-Coder)

|      | *これ        | *こう         | *こんな      | ケース数 (文) |
|------|------------|-------------|-----------|----------|
| CS01 | 7 (15.22%) | 13 (28.26%) | 2 (4.35%) | 46       |
| CS02 | 8 (14.29%) | 19 (33.93%) | 2 (3.57%) | 56       |
| CS03 | 3 (3.95%)  | 2 (2.63%)   | 0 (0.00%) | 76       |
| ES01 | 5 (5.75%)  | 12 (13.79%) | 1 (1.15%) | 87       |
| ES02 | 9 (13.85%) | 7 (10.77%)  | 1 (1.54%) | 65       |
| ES05 | 3 (6.52%)  | 3 (6.52%)   | 0 (0.00%) | 46       |
| KS01 | 5 (8.77%)  | 0 (0.00%)   | 0 (0.00%) | 57       |
| KS03 | 2 (3.45%)  | 12 (20.69%) | 1 (1.72%) | 58       |
| KS06 | 3 (6.00%)  | 16 (32.00%) | 1 (2.00%) | 50       |
| CA01 | 1 (0.68%)  | 2 (1.35%)   | 0 (0.00%) | 148      |
| CA02 | 2 (2.53%)  | 5 (6.33%)   | 0 (0.00%) | 79       |
| CA03 | 6 (4.72%)  | 4 (3.15%)   | 0 (0.00%) | 127      |
| EA01 | 1 (1.05%)  | 3 (3.16%)   | 0 (0.00%) | 95       |
| EA02 | 1 (0.86%)  | 3 (2.59%)   | 0 (0.00%) | 116      |
| EA03 | 2 (1.83%)  | 0 (0.00%)   | 0 (0.00%) | 109      |
| KA01 | 0 (0.00%)  | 0 (0.00%)   | 0 (0.00%) | 78       |
| KA02 | 2 (3.57%)  | 6 (10.71%)  | 1 (1.79%) | 56       |
| KA03 | 10 (7.75%) | 2 (1.55%)   | 0 (0.00%) | 129      |
| 合計   | 70 (4.74%) | 109 (7.37%) | 9 (0.61%) | 1478     |

表 13 上級・超級におけるア系の語使用 (KH-Coder)

|               | *あの        | *あのー         | ケース数 (文) |
|---------------|------------|--------------|----------|
| 超級            | 35 (6.46%) | 100 (18.45%) | 542      |
| 上級            | 57 (6.08%) | 37 (3.94%)   | 938      |
| 合計            | 92 (6.22%) | 137 (9.26%)  | 1480     |
| カイ二乗値 (自由度 1) | 0.033      | 84.330**     |          |

分析の結果、コ系の中でも、フィルター「こう」の使用頻度が超級において高い結果となった（カイ二乗値が 81）。超級でフィルターの「こう」の使用が他のレベルに比べて目立つことは山内 (2009) で既に指摘されているが、本結果でも同様の結果となった。また、ア系についても超級の使用頻度が高かったが、「あの」と「あのー」で比較した結果、超級は「あの」ではなく「あのー」の

使用頻度が有意に高いことが確認された。「あのー」というのはフィラーの時に出現する形式である。さらに、表 14 で触れるが、超級ではフィラーの「その」の出現が上級話者よりも多いことが確認できた（超級 42, 上級 10）。フィラーは結束性とは直接関わらないが、「こう」「あのー」「その」が指示表現の中での超級話者の特徴と見ていいだろう。

では、結束性に関わる指示表現において上級話者と超級話者が異なる点にはどのようなものがあるだろうか。分析の結果、「これ」「それ」の使用頻度に異なりがあることが明らかになった。表 8～12 はすべてコ系の使用頻度において超級が上級よりも高いことを示している。しかし、「この」「その」「あの」についてはフィラーと指示の用法があるが、これは KH-Coder で分類が不可能である。また、「これ」「それ」「あれ」についても慎重を期すため再度手作業で集計したい。手作業で「この」「その」と「これ」「それ」「あれ」の使用頻度を調査した結果を表 14 に示す。

表 14 「この」「その」「これ」「それ」「あれ」の出現数の比較（KY コーパス三名ずつ）<sup>6</sup>

|      | この |      | その |      | これ | それ  | あれ             |
|------|----|------|----|------|----|-----|----------------|
|      | 指示 | フィラー | 指示 | フィラー |    |     |                |
| CS01 | 2  | 0    | 5  | 2    | 15 | 21  | 0              |
| CS02 | 4  | 2    | 3  | 0    | 7  | 9   | 0              |
| CS03 | 4  | 0    | 1  | 0    | 0  | 4   | 0              |
| ES01 | 3  | 0    | 10 | 4    | 2  | 15  | 1 <sup>7</sup> |
| ES02 | 4  | 3    | 6  | 11   | 12 | 23  | 0              |
| ES05 | 1  | 0    | 10 | 9    | 0  | 8   | 0              |
| KS01 | 2  | 0    | 16 | 6    | 3  | 9   | 0              |
| KS03 | 3  | 0    | 11 | 3    | 2  | 7   | 0              |
| KS06 | 0  | 0    | 13 | 7    | 4  | 25  | 0              |
| 超級合計 | 23 | 5    | 75 | 42   | 45 | 121 | 1              |
| CA01 | 2  | 0    | 12 | 1    | 1  | 13  | 0              |
| CA02 | 3  | 0    | 20 | 1    | 0  | 6   | 4              |
| CA03 | 13 | 2    | 12 | 2    | 5  | 5   | 0              |
| EA01 | 3  | 1    | 6  | 3    | 1  | 6   | 1              |
| EA02 | 0  | 0    | 9  | 3    | 0  | 2   | 1              |
| EA03 | 0  | 0    | 5  | 0    | 1  | 3   | 0              |
| KA01 | 2  | 0    | 6  | 0    | 0  | 5   | 0              |
| KA02 | 18 | 0    | 1  | 0    | 0  | 6   | 4              |
| KA03 | 20 | 7    | 2  | 0    | 20 | 1   | 0              |
| 上級合計 | 61 | 10   | 73 | 10   | 28 | 47  | 10             |

その結果、話者によるばらつきは認められるが、「これ」については超級話者が 45 に対して上

<sup>6</sup> 文脈指示性の高い「これは」「これが」「これを」などを主対象とし、「これから」「それから」「それで」などは対象外とした。

<sup>7</sup> 「これはいけないです。あれはだめですとか」のように引用として用いられていた例。

級 28 と、約 2 倍の差が見られた。また、「それ」の使用頻度合計も超級 121 に対して上級 47 と大きく差がついた。「これ」「それ」「あれ」については KH-Coder の結果とほぼ同様であった。なお、「これ」については韓国の KA03 だけが突出して多いが、KA03 は「それ」の使用が 1 例だけであった。「あれ」の使用も超級は 1 に対し、上級は 10 であった。また「その」については、指示詞の「その」には差がなかったが、フィラーの「その」では超級 42 に対して上級 10 と 4 倍の差がついた。

これらのことより、超級話者の特徴は、「それ」と「これ」を談話の中で混在させていることにあると考えられる。話し手の産出の単位が段落から複段落となるため、指示関係も複雑化し、指示語の量も増える。その際、ソ系指示だけでは果たせない指示関係が出現する。超級の使用例を下に示す。

(4) T: ちょっと話題が変わるんですけども、今一にほんと中国は非常に一接近して、経済的にも、あの教育一なども文化交流も進みますけれども一、あの一、一番のきっかけとなったのはどういうことだったんでしょうか、(略)

S: ええ、それは一、もう、いろんな面から、考えられると思います、まひとつは一、もちろん、こう同じアジアで、同じ一、アジア文化圏の中であって、もうこ歴史からの一、お一、往来とか交流とか、それがあるから、人々というのはそれを一、大事にしていこうというさういう、こう一、気持ちとか、それはもう捨てられない、と思います、忘れられないと思います、こう名字にしてみても、にほんじんがもう読み方はいろいろ違うんですけどもやはり、ほとんど、名字には漢字を使ってるんですね、これが、もう一生のつながりにも大きな役割をするんだと思います、でも現実、これは、も歴史からの、文化的な、いろんな交流だとかさういう面からも考え大きなもう大まかな、ことであって、現実的に、角度からみても、〈うん〉これはもう必然的に必ずさう一、ならなければならないことになっているんだと思います、と一いいますのは、経済となりますと日本は非常に進んでいるんですけども、まだまだ進もうとすれば、新しい、こう市場を開発しなけりゃいかん、いけないんですね、物をたくさん作るんですけども、こう作る作った物を、どこかへ、売りさばかなければいけないんですね、え一これがひとつ、それから中国から、こう言いますと、中国は非常に遅れていますんで、自分のく国を豊かにしようとするれば、やはり進んだ技術と、お一進んだ設備が必要なわけですね、これが、非常にお互いの利益が合うわけです、〈うん〉一方的ににほん一が中国を、援助するとか、すえ一とろんなほ、こう一角度から、こう支援さんとか、さういうにしてもそれが、にほんの、損には絶対ならないわけで、それから、中国がにほんから技術設備を取り入れる、にししてもですね、まだ中国の損にはならない一、ええかなお互い、の、利益に、これはもう非常に、こうあっているものだ、だいいことだ、だから、もう一、これからも、ますます、こう、日中関係は、友好的なさういう面が変わるんじゃないかと思ひます、え一長い歴史の一、流れからみればこれはもう必ずさう、なると思ひます、中にはもう、まえにもちょっとあったんですけどもさういう幸運な、こう一時期がありましたし、これからも少しはよそ

予測されるんです、でもそれはもう、もう 20 年 30 年、50 年まではそれはほん一の短いあいだですね、長いこれ一までも 2 千年も以上も、こう交流が、して一きましたし行われてきましたしこれからも、人類はあと 50 年で、もう、〈うん〉絶滅することでもなくて、こうずうっと 200 年、500 年までも推測されますからですね\*\*ない面から見れば、もうまだまだ友好的に、そういうふうに、つきあっていくんと違うんですか、〈ああそうですか〉とにほんおくっておりますけれど (CS01)

この話者は「それ」と「これ」を一つの談話の中で混在させている。使用の適切性には疑問を挟む余地があるが、重要な点は超級話者になると文脈指示の「それ」と「これ」を自分自身の中でルール化し、混在させて使用できるようになるということではないだろうか。庵 (2007) にあるように、遠距離照応にはコ系しか用いることができない。そのため超級のよう複段落の産出が求められる場合、遠距離照応の必要性が増加し、コ系が増加することになる。例えば、

と一いいますのは、経済となりますと日本は非常に進んでいるんですけども、まだまだ進もうとすれば、新しい、こう市場を開発しなけりゃいかん、いけないんですね、物をたくさん作るんですけども、こう作る作った物を、どこかへ、売りさばかなければいけないんですね、えーこれがひとつ、

における「これがひとつ」は、先行する発話のまとまりが談話全体のどこに位置づけられるかを示すもので、遠距離照応の代表的なものである。

また、ソ系表現から始まり、途中でコ系が多く出現しているというのも、聞き手に主導権のある話し方から話し手に主導権が渡り、話し手の領域として引きつけて発話していることを意味するのではないだろうか<sup>8</sup>。また、談話の途中で自分の複数の論点を整理して提示する意味で「これがひとつ」という発話を挟んでいる。この用法は特に超級のコ系使用として注目される。

次の (5) も同様に一段落中にソ系とコ系の文脈指示詞を混在させている。

(5) T: うん、どんなお仕事をしてるんですか

S: えっとですね、あの一、海外企画が、〈うん〉も、つい最近、か、あの一、社長の直轄部門になりまして、〈うん〉で、その意味は、あの一、企画として、あの一、2つ、主に、あの一、仕事は分けてますが、一つが販売、〈うん〉態勢をつくると、〈うん〉で、二つ目が、あの一、製造と、あの一、これはもちろん、あの一、海外で、あの一、やる、ことですから、あの一、新しい市場にはいるために、あの一、どのようなマーケティングをしなければなりませんか、んで、あの一、もしかしたら、あの一、その、販売をするときに、ま、まずは、あの一、その、供給しなければならぬですねえ、〈うん〉その、供給の面は、あの一、工場を造るとか、それで、あの一、工場立地調査、あるいは、あの一、流通事態調査、そのような、あの一、調査、をしましてから、じっし、ま、実際に会社を作るんです、で、もう、ずっと、あの一、その、

<sup>8</sup> その証拠としてターンの開始は常に「そうですね」とソ系で始まる。



企画の段階から、あの、会社を設立するまでの仕事しまして、そのあとは、事業部に、〈うん〉あの、もう、我々の仕事は終わって、そ、それで、その、事業部が、〈うん〉やります、〈うん〉で、私の場合は、あの、米州担当ですので、あの、最近はですね、中南米が多くて、あの、スペイン語は、あの、ちょっと、日本語、より、あの、ちょっと、あの、上手だと思えますけれども、〈うん〉あの、もう、何回もメキシコに行ったり来たり、その、今、仕事はそうなってますねえ (ES06)

また、超級話者には「っていう」のような引用形式の使用が多く見られることは既に報告されているが(山内 2009)、この引用形式と共に「これ」が多く出てきた。例を(6)に示す。

(6) T: ところで、Sさんの趣味はなんですか

S: 趣味ですか、〈うん〉うーん、このごろ、これといった趣味はないんですけども、〈うん〉まあ暇な時一本読んだりとか、(KS08)

この使用は「こうした」「こういう」「こう」とも連続すると思われ、直接的に結束性には結びつかないかもしれないが、引用を混ぜながら談話形成ができるというのは複段落の中でのまとまりの明示化に寄与しているのではないだろうか。

一方、上級話者の使用を見ると、ある程度の段落では産出できているが複段落の産出には至らないため、指示用法も限定的である。しかし文脈指示のソ系が出現しているのは確認できる。

(7) T: でも、もう十分あれは美しいでしょう、あれだけ花がいっぱい、たくさん、道路に咲いてるのに、まだいりますか、十分きれいですよ

S: でも、アンケートによりますと、何かあの、そっちは緑が多いですから、赤いのが、あの、黄色いとかそういう色が、鮮やかな色がその通りは、あの朝とか、あの午後の5時からなじのとき、あの、サラリーマンが駅から、たくさんの方が、あの、はな、あのう、歩いて、来ますから、それをみんなあのう、仕事も忙しいし、電車のなかラッシュアワーときも、けっこうストレス溜まったと思いますから、そういう、あの鮮やかな色とか、そういうみったらあのう、ストレスちょっと解消できます、と思ってます

T: そうかなあ、いやあ、僕は緑の花は、緑の木見たほうが、目に、目にもやさしいし、花見るよりはずっといいと思ってるんだけど

S: それは、あのう、.. 単一な、あの、何といいます、単一な色、もちろん、緑はいいですけど、それは、どう、どうして緑がいいというのは、あの、いつも、あの、学校で勉強する人とか、いつも会社で仕事する人は、あの目が疲れて、たまにあの、その緑のとか青空見たらあの、目の疲労とか、解消できますが、あの、毎日毎日同じけえしき、変わらないけえしきを見たらやっぱり飽きる、と思います (CA01)

村田(2012)ではB1(中級前半)よりB2(中級後半~上級前半)のほうがソ系をよく用いるという報告がされているが、上級と超級の異なりとして「それ」の増加に加え、「これ」の増加も認められた。

おそらく村田の言うコ系は直接指示に関するもので、中級～上級に上がるに従い段落内の結束表現としての文脈指示のソ系が増加するのだろう。しかし、それ以上の規模となる、複段落の結束性を高める装置としてのコ系の出現までは含意されていないと言える。

#### 4.2 聞き手配慮に関わる部分 1：談話中における「(です)ね／よ」の使用について

次に、聞き手配慮に関わる部分として、終助詞の「ね」に注目する。「ね」には、共有知識の指示機能（神尾 1990, 金水 1991）やモダリティ機能（益岡 1991）があるとされ、聞き手の知識領域に関わり、会話においては、「A:暑いですね」「B:そうですね」のように、聞き手との「共感」や「同意」を表したり、確認を要求したりする際に用いられる。このようないわゆる「共感」や「同意」の「ね」は、上昇イントネーションを伴うことが多いが、下の例（8）や例（9）の下線部分のように、やや平板なイントネーションを伴い、聞き手の感情を配慮して自身の発話を和らげる「発話緩和」（宇佐美 1999）の機能を果たす「ね」や、次の表現を探す時間を稼ぐために使われ、まだ発話が継続することを表す「発話埋め合わせ」（宇佐美 1999）の機能を持つものもある<sup>9</sup>。

この「発話緩和」と「発話埋め合わせ」の「ね」の使用頻度が上級よりも超級の方が多傾向が見られた。話者によっては「(です)ね」の代替形式として「(です)よ」を多用していた。また、英語圏の話者の中には「それはですね」ではなく「それはね」「季節でね」のように「です」のない形を混在させていた。これは談話の継続を表すマーカーであると同時に、聞き手に対する注意を促す作用もあると思われる<sup>10</sup>。

- (8) えーもう1時間以上も、きのう一、京都までいってきたんですけど、やはりーもうお互いにす、向かい合って座って、もう2時間近くも、一緒に座っていたんですけども、やはり自分なにもすることな、な、なくてもですね、目をつぶっていたりひとりでなにかを考へたり、そうするんですね、もーこれも、やはりー、ま人ですから、これ巡り合わせですからそういう、電車の中で偶然に、ま一緒に席をとにもしたという、ちょもう少しちょっと大事にして、じゅうぶん生かしてですね、あどこからきだ、何々ですけどもそこはどうですかとですね、こう一話を少しですね、こうしながら、笑いも少し、そういう一具合にーとかですねそれもい、まーちに、しながら、こう旅をするとですね、非常にいい旅、少しでも、実りのある旅になるかと思うんです（CS01）
- (9) あーそーですね、でん、中国一、でもですねそういう傾向があるんです、というのはひとりっ子ですから、はい、ですから、例えばあの一、今中国ではよく、えーと、6たす1、イコール7というような、あの一言い方があるんですね、6というつつまり、あの一、まず、親、お母さんお父さんですね、でそれから、親のほうのお父さんお母さん、でそれから、あの一、え、あ、お、ごめんなさい、お父さんがわの、お父さんお母さんですね、つまりおじいちゃ

<sup>9</sup> 宇佐美（1999: 253）も述べているように、「発話埋め合わせ」は「発話緩和」から派生したものであり、両者の機能を分類することは困難である。

<sup>10</sup> 英語の“you know”に相当すると思われる。



山内 (2009) では「あの」「あのー」「まあ」「なんか」「と」「その」「こう」が超級話者に特有のフィラーであることが述べられている。本研究でも同様の結果が確認されたが、それ以外にも超級の方が有意に多くなるフィラーとして「もう」「いや」が認められた。

「もう」というのは「もう食べた」のように完了用法が有名であるが、「いやーもう 大変だったよ」「このままいくともうー大変なことになるんじゃないですかね」のように、完了の意味ではなく、実質的な意味を持たないフィラーとしての用法が存在する。この「もう」の使用が上級より超級の方に多く見られた。出現数の比較を表 15 に、出現例を (10) に示す。

表 15 「もう」「まあ」「いや」の出現状況の比較<sup>11</sup>

|       | *もう         | *まあ         | *いや        | ケース数 (文) |
|-------|-------------|-------------|------------|----------|
| 超級    | 80 (14.76%) | 83 (15.31%) | 33 (6.09%) | 542      |
| 上級    | 44 (4.69%)  | 60 (6.40%)  | 20 (2.13%) | 938      |
| 合計    | 124 (8.38%) | 143 (9.66%) | 53 (3.58%) | 1480     |
| カイ二乗値 | 44.069**    | 30.279**    | 14.448**   |          |

(10) で、そこから、にほんじんはもう、にほんじんで、いるが、日常生活はすごい西洋化してる、\*て、その、ふたつの、めんを、こういうふう<sup>に</sup>に背負って、生きていけないといかないってというような、感じであう、うちに、例えばこういう売春とかに関、関する、あのリアクションですか、がなんか、おかしくなっているとも言いますかすごいなんかん、迷っててもう、混乱してめちゃくちゃになってるってというような感じだと思います (ES01)

このような多様なフィラーを混在させながら談話を進行させるのは、聞き手に対する様々な配慮の表れであると考えられる。「もう」は後続の談話内容が気楽なものではないことの前振り表現であろう。そのため後続の談話内容の負荷が軽いことを前振りとして提示する「まあ」との共起は制限的であり、「まあもう」はあるが「もうまあ」はない。また、「もう」と共起する場合の「まあ」は「あらまあ」同様にピッチが高く、驚きや強調の意味を持つ場合である。こうした分析は本稿での主目的ではないが、「もう」同様、実質的な語彙の意味が薄まり、フィラーとして機能している語のレベルごとの出現頻度を分析すればさらに超級の談話の特徴が明らかになるだろう。

OPI マニュアル (ACTFL / 牧野 1999) には、超級話者の特徴の一つとして「精密な描写ができる」という項目があるが、その説明は、「聞き手があたかも実際にその経験を目撃したかのように感じるほど、豊かに生き生きと細部にわたってある出来事を叙述することを意味する」とある。上述の多様なフィラーは、何かを描写する際<sup>に</sup>出現することが多いが、超級話者は、これらのフィラーを巧みに使うことによって臨場感のある話し方をしていけると言える。

<sup>11</sup> 「もう」には副詞的用法の「もう」も含まれるが、観察した限りでは、フィラーの「もう」は超級話者に明らかに多く出現していた。

#### 4.4 聞き手配慮に関わる部分 3：試行的提示

最後に、聞き手への配慮に関わる部分として、試行的提示について見る。前述の OPI マニュアルにもあるように、超級話者は、「精密な叙述ができる」という特徴があるが、その際には、聞き手にとって分かりやすい表現を選んだり、適宜注釈的な発話を挟んだりしながら、聞き手の理解を確認しつつ発話を続けなければならない。そのような場合に出現するものとして、「試行的提示」が挙げられる。試行的発話は、例 (11) ～ (13) のように、「何ていうか」「あのー」「こう」といった前節で触れたフィラーと共起することが多いが、それは、聞き手に配慮しながら表現を選ぶ場面で使われるためである。

- (11) あ、韓国も今、やはりあの福祉関係の、〈んー〉そういう問題とか、〈んー〉そういう社会的なそういう環境問題とか、そっちの方になんか、ま、目があの、向いていってますから、あの、だんだんと良くなると思います 〈んー〉でも日本よりは、ちょっとあの社会問題っていうんですか、ま、今の福祉環境問題は、〈んー〉ちょっとあの低いレベルですよ (KS01)
- (12) 日本の大学生はあんまりなんか先生の講義に対して、静かというか、ねえ、まあ友達あいだでなんか私語なんかはするんですけど、先生の講義に対してはあんまり反応がないんですよここの大学では、韓国ではもうちょっととそこまではいってないんですけど、あんまりほかの学生が静かなので、なんか、ちょっと、こういっしょにやりにくいというか、わたしはやっぱりこう授業中でもなんか、疑問点なんかがあったら、こう聞きたいし、したいですね、けどなんかまわりが日本の大学生はみんなやっぱり静かなので、そののへんがちょっと違うかなって思いましたけど (KS03)
- (13) 自分が考えてることとか自分のなんか理念やなんか思想のためになんかこう、学生達が自己発現というんですか、主張するのはものすごくなんか大事だと思うんですね、(KS03)

本研究では、北野 (2005) に従い、「と (て) いうか」「と (て) いますか」「と (て) いうんですか」「と (て) いうんでしょうか」<sup>12</sup> が付加された形式を試行的提示として、上級レベルと超級レベルで出現数の比較をした。その結果、超級ではすべての話者が使用しており、上級では、使用した話者が二人しかいなかった (次頁表 16)。このことから、試行的提示の使用は超級話者の特徴の一つであると言える。

聞き手の理解を確認しながら発話を続けられるということは、会話を続けること自体に集中しなければならないレベルの学習者にとっては難しいことであり、超級話者の大きな特徴の一つである。超級話者にのみ「試行的提示」が見られるということは、この特徴の現れの一つと言えよう。

<sup>12</sup> これらの形式に「何」がついた「何ていうか」、「何といますか」や、「何ですか」、「何だ」、「何だろう」などは、北野 (2005) に従い、フィラーとみなし、「試行的提示」に含めていない。

表 16 試行的提示の出現状況の比較

| 超級   | 出現数 | 上級   | 出現数 |
|------|-----|------|-----|
| CS01 | 1   | CA01 | 0   |
| CS02 | 2   | CA02 | 0   |
| CS03 | 2   | CA03 | 0   |
| ES01 | 3   | EA01 | 0   |
| ES02 | 1   | EA02 | 2   |
| ES05 | 2   | EA03 | 0   |
| KS01 | 2   | KA01 | 0   |
| KS03 | 9   | KA02 | 1   |
| KS06 | 12  | KA03 | 0   |
| 合計   | 34  | 合計   | 3   |

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、ACTFL-OPIの評定基準とCEFRの枠組み、および先行研究から、超級話者の談話の特徴づける談話特性をまとめ、それらを、談話内容の質に関わる部分と聞き手への配慮に関わる（メタ言語）部分に大別した（表6）。そして、テキストマイニングの手法等を用いて、OPIデータを比較分析（上級×超級）することにより、実際にどのレベルでどのように形式の使用が見られるかを検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 超級話者は上級話者に比べ文脈指示の「コ」の使用頻度が高くなっていた。これは複段落における結束性を高める要因の一つである。
- 2) 聞き手に対する配慮の増加として、発話緩和や発話の埋め合わせの機能を持つ「ね」の使用頻度が高い。
- 3) フィラーの多様化が見られた。
- 4) 聞き手に対する配慮から、言葉を選んでいることを示す試行的提示の使用頻度が高い。

これまでOPIというのはタスクの実現によってレーティングされてきたが、談話の形態素レベルにおいても、レベルの差があると分かれば、そのレベルごとの談話特性を整理することは、今後の日本語能力の評価の一つの指標になるのではないだろうか。

本稿では、指示詞、終助詞、フィラー、試行的提示を中心に分析したが、超級話者の談話の特徴づける要素は、これだけではない。今後は、フォーカス、注釈、発話行為の目的を提示する形式など、その他の要素についても、検証を重ね、上級～超級話者の談話の諸相を明らかにしていきたい。さらに、初級～中級レベルで出現する談話特性の分析を行い、初級～超級までにわたる、体系的な談話要素の指標が示されれば、より有用な評価基準となるのではないだろうか。



## 参考文献

- 藤原美保・竹井光子 (2010) 「接続表現の使用とゼロ代名詞容認度: 一貫性の観点からの実験と考察」南雅彦 (編) 『言語学と日本語教育 V』 103-121. 東京: くろしお出版.
- Halliday, M.A.K. and Ruqayia Hasan (1976) *Cohesion in English*. [安藤貞雄・永田龍男・高口圭軒・多田保行・中川憲 (訳) (1997) 『テキストはどのように構成されるか—言語の結束性』 東京: ひつじ書房]
- 橋本直幸 (2011) 「学習者コーパスからみる超級日本語学習者の言語特徴」森篤嗣・庵功雄 (編) 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』 241-257. 東京: ひつじ書房.
- 東伴子・櫻井直子 (2012) 「CEFR B1 レベルの産出活動におけるモダリティ表現」『AJE ロンドンワークショップ予稿集』 11.
- Hinds, John (1990) Inductive, deductive, and quasi-inductive: Expository writing in Japanese, Korean, Chinese, and Thai. In: U. Connor and A.M. Jones (eds.) *Coherence in writing research and pedagogical perspectives*, 89-109. Teachers of English to Speakers of Other Languages, Inc.
- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー: 「断り」という発話行為について」『日本語教育』 79: 41-52.
- 庵功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』(日本語研究叢書 21 Frontier series). 東京: くろしお出版.
- 猪崎保子 (1997) 「日本人とフランス人日本語学習者の会話にみられる「修正」のストラテジー」『世界の日本語教育』 7: 77-95.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報の繩張り理論—言語の機能的分析』 東京: 大修館書店.
- カノックワン・ラオハブラナキット (1997) 「日本語学習者に見られる断りの表現: 日本語母語話者と比べて」『世界の日本語教育』 7: 97-112.
- 金水敏 (1991) 「伝達の発話行為と日本語の文末形式」『神戸大学文学部紀要』 18: 23-41.
- 北野浩章 (2005) 「自然談話に見られる逸脱的な文の構築: 試行的提示のための形式『…と言うか』『…ですか』など」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話』(シリーズ文と発話第 1 巻) 91-121. 東京: ひつじ書房.
- 甲田直美 (2001) 『談話・テキストの展開のメカニズム』 東京: 風間書房.
- 牧野成一 (監) (1999) 『ACTFL-OPI 試験官養成マニュアル』(1999 年改訂版). 東京: アルク.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 東京: くろしお出版.
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』 東京: くろしお出版.
- 村田裕美子 (2012) 「B1 レベルに現れる言語形式の特徴—「スピーチテキスト」を題材に—」『AJE ロンドンワークショップ予稿集』 15.
- 阪上彩子 (2010) 「日本語学習者の話し言葉における不適切な指示詞の使用」『日本語・日本文化』 36: 27-43.
- 榊原芳美 (2008) 「「詳細な叙述」の効果的な指導を目指して—コーパスに基づく考察—」*15th PJPF—Princeton Japanese Pedagogy Forum*. 81-92.
- Stubbs, Michael (1983) *Discourse analysis*. Oxford: Basil Blackwell.
- 坪根由香里 (2009) 「OPI における中国語話者の「の」の使用状況」『早稲田日本語教育学』 4: 43-55.
- 堤良一 (2012) 『現代日本語指示詞の総合的研究』 東京: ココ出版.
- 宇佐美まゆみ (1999) 「「ね」のコミュニケーション機能とディスコースポライトネス」現代日本語研究会 (編) 『女性のことば・職場編』 241-268. 東京: ひつじ書房.
- 山内博之 (2009) 『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』 東京: ひつじ書房.
- 吉島茂・大橋理枝 (訳) (2004) 『外国語教育〈2〉外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 東京: 朝日出版社.

## Discourse Characteristics of Superior-Level Non-Native Japanese Speakers: Analysis Using a Text-Mining Technique

MATSUDA Makiko<sup>a</sup>

MIYANAGA Aiko<sup>b</sup>

IORI Isao<sup>c</sup>

<sup>a</sup>Kanazawa University / Project Collaborator, NINJAL

<sup>b</sup>Kwansei Gakuin University / Project Collaborator, NINJAL

<sup>c</sup>Hitotsubashi University / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

The purpose of this study is to investigate discourse characteristics of the Japanese produced by superior-level non-native speakers. We first considered the ACTFL-OPI and CEFR rating scales and reviewed previous research. We then extracted the factors that characterize superior-level speakers and divided them into two categories: those related to discourse quality and those related to consideration for listeners. On the basis of OPI interview data, we compared these factors in the speech of superior-level speakers and that of advanced-level speakers by applying a text mining technique. The results revealed the following characteristics of superior-level speakers: (1) they use more *ko-* type anaphoric demonstratives than advanced-level speakers, (2) they use more sentence-final particles that function as utterance mitigation, (3) they utilize varied fillers, (4) they use attempt expressions to demonstrate that they are seeking appropriate words.

**Key words:** superior speaker, text mining, demonstrative expressions, fillers, sentence-final particles